

船団

●第99号

特集Ⅱ 船団100号物語



会員作品



池田 澄子

石塚 涼

炎昼や婆見坂は手を振る坂
夏果てのかもめよ此処は街ですよ
「百万弗の夜景」晩夏の通夜の灯も
苦瓜へ体乗り出すための窓
騎馬戦のあらウチの子がずり落ちる
小春日の土なり手なり喜び合い
雨のち曇たそがれのたれかれに

早春やフエリーは暗き口を持つ
しばらくはいひだこ箸に挟みをり
秋涼や手触りの良き皮手帳
左京とも右京ともなく初秋かな
時雨るるや傘からひらとラブレター
小寒やモナリザの笑みピンで留め
しばらくは波音ばかりしらす干し

一門 彰子

つじあきこ

サイダーのシユワツとさざ波ほどの恋
小坊主の読経止むときところてん
ひんやりとひとり経読む茄子に花
線ほそく生きて二人のさくらんぼ
ひまわりの火影にわたくしの夕餉
朝の眼に祭りが来るよ花カンナ
祈りは擦傷鬼百合は暮れて居る

かなぶんぶん長期滞在許可します
遠花火人が集まる坂の下
青い灯のトンネルくぐり涼新た
この庭が好きです秋の蝶がくる
妹は笑っているだけ青蜜柑
かなかなや開けっ放しの家が好き
ああ君もいたのか秋の金魚かな

伊藤五六歩

辻 水音

風死して鳥葬に付す秋葉原
秋分や囲碁も恋路も帰り途
かはらけのかけら一片後の月
長月のわたくし雨に濡れに行く
鳥渡る緘して宛名書き損ず
菌凶鑑売りて土星の環が欲し
馬手に賽弓手に木枯しあとは素手

引くところは引いて扇子をお借りして
ハイドンもベートーヴェンも夕焼けて
血管のガシツと音す暑さかな
桃色のステテコへもの申しけり
夏薊とんとんゆくはつまらぬよ
蟬の夜水うらなひの水こんこん
まーるい日とんがつてる日盆がゆく

辻村 拓夫

公園のヘプバーンなる薔薇は海
百足くん莫蔭の真ん中突っ走る
向こうまで透けて見えたる裸かな
戯れにやせているのにあっばつぱ
充電の物言わぬ機器秋立つ日
栗鼠が樹を駆けのぼる朝木曾は秋
秋燕 低空飛行 徐行せよ

坪内 稔典

寝軟んでげんげになってしまったよ
びわ食べて君とつるりんしたいなあ
尼さんが五人一本ずつバナナ
鳥籠の掃除ざぶざぶ夏休み
白樺は直立する木夏がゆく
開通の銀河鉄道ぶどう垂れ
友人に葡萄のある日などがあれ

津田このみ

磔のごと四肢伸びて熱帯夜
誰とも会わず白木槿白桔梗
源流のそつと始まる花藻かな
八月の海女笑っては唄っては
向日葵や一筆書きの笑い顔
金魚ひら神の眼となつてはいる
行く夏の花は真白に無音なり

中谷三千子

戻り梅雨根切りもやしの気になる根
天道虫三ツ星レストランで昼
箱庭やソーラーパネルの見積書
アリバイは消してるつもりかたつむり
防犯カメラ感知している夏燕
水平線地球は丸い西瓜切る
炎昼に出掛けあちこち痒いとこ

長沼 佐智

カサブランカ返事はハイとカタカナで
赤ん坊とそうめんきつちり分け合って
墨の香の散らばっている夜の秋
夏涼しみんなが居ないこの畠
席に着く手をする蠅のそこに居て
カバン置くつい寄道の蛇苺
良寛は馬鹿と南吉 鱈雲

中原 幸子

高原のころつつつつつばめの子
しーしーにフルーツ山盛りパフェがあつ
ラムレーズンアイスあおあおと夜空
友がみなわれより速しかき氷
しまった！ 猿よ熱帯夜はダメよ
立秋の輪になり列になり天馬
秋の象ちよつと笑って人を見る

中林 明美

五月かな番号札をわたされて
パレットに黄を絞り出す梅雨晴れる
この夏の押印指の腹洗う
ニシキヘビ料の君の軒にみみ尖る
カンカン帽埃っぽいので叩く
嘶ける淋しき夏の馬柵つづく
月白の象舎鎖を飼っている

火箱 ひろ

母さんの死後の日だまりゼラニウム
わたくしの過去がひらひら金魚玉
黄菅夕菅この道でよかったの
水槽の金魚の揺らす水平線
恋終る冷し中華も終りです
青空へビルの稜線原爆忌
青糸トンボもしかして水溶性

陽山 道子

七夕や筋肉体操する時間
塾頭の頭を越えて夏の蝶
胸板のうすい若者日の盛り
夏を行く多佳子と久女評伝記
ぼっぺんのぺこんぼこぺん夏の果て
彼が来てパントマイムの夜の秋
新涼の不揃い石段濡れている

ふけとしこ

大潮の引潮にして蟹の穴
青虫が青虫を乗り越えて行く
先立つは赤き天牛明智越え
太りゆく青柿に明日吾に明日
夏の月アスパラガスを素揚げして
蛇の幼し茶畑へ迂り込み
昼顔の蔓昼顔を攻め立てて